ある朝僕は

ある朝僕は
眩しげに微笑んではじまるだろうか
ある雨の日に君は
本当に生きた日を考える
君が本当に生きた日を想う
学校を中退して工場で働いた日々
賭博に熱をあげて勝利した祝杯の夕暮れ
曖昧な敗北に涙した季節
恋人に投げた初めての一瞥
あの一瞥
告白をした帰り道の熱い抱擁
悦びにふるえた美しい夜
そんな日々を君は想う
貪るように想う
しかし君が本当に生きた日は
学生運動の真っ只中で振り下ろされたジェラルミンの楯の下で驚愕の眼差しを向けた日か
もしれない
あるいは恋人にちっぽけな嘘がばれて
仕方なくサヨナラと手を振った日かもしれない
考えたくもなかった母の死の朝だったかもしれない
暗い色をしたみぞれの朝に死んだ母を想って君は
また新たな涙を流したに違いない
いや、流すかもしれない
だけど

……りりっく

だけど僕の朝はどうだろう
僕が本当に生きた日は
今、この朝でなければならない
美しい君を失った
この朝でなければならない
ゴクリ、と
悲しみを飲み込む事もできずに
君の姿を咀嚼しながらペンをとる
詩人の僕は途方にくれて
あの日、美しい君が恥ずかしそうに焼いてくれた形の悪いオムレツの味を想って
ただ君を想って詩を描く
詩人の僕はこの朝を
本当に生きた日にするために
今、この想いをうたう
君の朝が暗い朝であるように
僕の朝は今
このような朝だよ

青春のルーヴル

若くて無知な僕達は
崇拝した数々の偶像に別れを告げるため
ゆくあてのない外出をするのだろう
真昼だというのに半ば夢見心地で歩き続けながらひたすら夜を待つ
僕らの足がとうとう夜に差しかかったころ
期待通りの雨が降る
傘を持たない僕達は
土砂降りに変わっても誇らしげに濡れてゆく
青春の暗い町を離れ、賑やかな町に渡された橋の真ん中で
僕達はふと、美しい恋人を思い出す
忘れられてゆく気の毒な恋人なんてはじめからいなかったみたいに思い出す
僕達は新たな偶像の予感に震えながら違う町へと走るだろう
崇拝した数々の偶像なんてそんなふうに忘れ去るものさ
ルーヴルへ行ってごらんよ
石像のヴィーナスが語りかけるよ
片腕の私こそが
永遠の女神なのだと
震える君を抱きしめるには
片腕で充分だと微笑んでくれるから
ルーヴルへ行こうよ

食堂のうた

食堂の暖簾をくぐる
綿のはみでた丸椅子
割烹着のおばちゃん
ひび割れた壁に
「カキフライあります」
と書いてある
「かつ丼」
「豚汁」
「目玉焼き」
「オムライス」
「しょうが焼き」
「フライ定食」
そして
「カレーライス」
石油ストーブのやかんから
白い湯気がたっている
小さな座布団に
猫が寝ている
「カレーライス下さい」
猫があくびする
「大盛りで」
「あいよ、大盛りね」
テレビからニュースが流れてる
どこかで飛行機が墜ちたらしい
「目玉焼きも下さい」
猫が背伸びする
カレーライスと目玉焼き
目玉焼きの横には千切りのキャベツ

母さんは
マヨネーズが嫌いだった
カレーの上に目玉焼きをのせる
キャベツの横にマヨネーズ
目玉焼きにソースをかける
この冬は
ふるさとに帰らなかった
カレーライスと目玉焼き
食堂には愛がある
「お勘定」
出かけようとした猫が
振り返った
食堂には愛がある
振り返った猫が
一度だけ鳴いた
おばちゃんが
微笑んだ